お茶の水学術事業会会報 第54号

# ellipse

［エリプス］

令和3年
2月

楕円（ellipse）には焦点がふたつあります。男性中心の社会から、女性と男性がそれぞれに中心（焦点）となる社会を目指すという思いを込めて、誌名を［エリプス］と名づけました。

**TOPICS**

## 宮里暁美 お茶の水女子大学教授（専門分野：保育学）監修の新しい体験型絵本『たべることば（TASTEFUL WORDS）』（フレーベル館、2019年）

ワ・タ・シ

深津千鶴　FUKATSU, Chizu　イラストレーター
東京生まれ。1988年、お茶の水女子大学文教育学部地理学科卒業。在学中に、『週刊朝日』誌上にて「山藤章二の似顔絵塾」特待生となる。広告代理店勤務を経て、1990年より作家活動を開始。書籍装画、CDジャケットなど多く手がける一方、エッセイ執筆、壁画制作などの活動を展開している。

**REPORT**
続報！「伝統芸能×未来」プロジェクト（JPAF）
　第3弾 トークイベント「歌舞伎とマンガ」
夢のつばさ♥プロジェクトニュース

**INFORMATION**
イベント情報
事務局よりお知らせ

特定非営利活動法人
お茶の水学術事業会

## 続報！「伝統芸能×未来」プロジェクト（JPAF）

# 第３弾トークイベント「歌舞伎とマンガ」

2020年12月1日（火）18:30～20:00
会場　：お茶の水女子大学 徽音堂
登壇者：坂東巳之助（歌舞伎俳優）
　　中野博之（『週刊少年ジャンプ』編集長）
　　埋忠美沙（司会、お茶の水女子大学准教授）

「ellipse」第53号にて、お茶の水女子大学で、2020年度より、伝統芸能の諸相を通して「文化、すなわち人間の営みについての広い視野を培う」試みがスタートしたことをお伝えしました。その後、この「伝統芸能×未来」プロジェクト（JPAF）は、二つのイベントを実施しました。一つは、お茶の水女子大学の大学生・大学院生 約40名を対象とした特別講義「中村勘九郎 × お茶大生」。2020年11月5日にZoom形式で行われました。もう一つは、12月1日に徽音堂において開催されたトークイベントです。そのレポートをお届けします。

### トークイベント「歌舞伎とマンガ」に参加して

近年、マンガを題材にした「スーパー歌舞伎Ⅱ（セカンド）ワンピース」（2015年）、「新作歌舞伎 NARUTO -ナルト-」（2018年）が制作・上演されて、大きな話題となり、大好評を博した。そこで、両作品に出演したマンガ大好きな歌舞伎俳優と原作マンガを連載した『週刊少年ジャンプ』の編集長をゲストに迎え、歌舞伎の作品・観客層の未来を異ジャンル取り込みという観点から探ろうというトークイベントである。

7月に開催されたこのプロジェクトのリリース・イベントはオンライン開催であったが、今回は実際に会場に参加者を入れての開催（リアル開催というのだろうか？）であった。受付での手指消毒、検温は言うまでもなく、入場者数を会場の収容人数の10分の1以下に抑え、前後左右2席以上空けた指定席制とし、ソーシャルディスタンスも十分に確保されていた。夜にかかる時間帯であったが、会場の雰囲気は開催側、来場者双方の気概のこもった熱気に満ちていた。

始まる前から壇上の大スクリーンに原作マンガと上演歌舞伎の写真、映像が映し出されていて、双方とも良くは知らない者には嬉しい呼び水になった。

トークは、壇上スクリーンを背景に登壇者3氏が並び、司会の埋忠先生からの問いかけに、巳之助氏、中野氏がそれぞれ答える形でスタートした。途中、巳之助氏と中野氏が対談する場面もあり、最後には客席からスマートフォンで送信された質問に登壇者が答えるという交流の機会も設けられた。

内容は、人気マンガの歌舞伎化上演に至る経緯、制作過程でのエピソードが中心であった。ゲストがそれぞれの現場で中心的役割を担っていたことに加え、歌舞伎とマンガの双方に精通した気鋭の研究者による愛情あふれる進行で、トークは具体的で分かり易く、しかも決して裏話的なものに留まらない、深みのあるものとなった。

左から埋忠先生、巳之助氏、中野氏

印象に残ったのは、歌舞伎化のきっかけが、満を持してではなく、「やろうか～」的な偶発的なものだったらしいということ。マンガ界、歌舞伎界双方の創造に対する感性の鋭さと融通無碍の姿勢を感じた。「見得」という歌舞伎に特有の演出とマンガの絵面が似ていることから、相性の良さに気づいたという。

舞台化にあたっては、作品全体を描くか、作品中のある場面を中心に切り取るかということが一つポイントとなる。歌舞伎には既にどちらの制作手法もあるので、原作が一番生きるような方法を選択できたことも成功の一因だったようだ。また、原作マンガでは漢字にそれをもじったカタカナでルビが表記されている技名について、作者自らが「歌舞伎的な漢字名で読んだ方がいい」と提案したというエピソードも披露された。その一方で、台詞、演出、衣装において、歌舞伎・原作マンガとも譲れない部分があったという。これらの話からは、歌舞伎俳優であり、原作マンガを愛読して隅々まで熟知していた巳之助氏が、橋渡し的な役割を果たしたことが窺われた。

多くの若い人にとって歌舞伎は敷居が高いものらしい。自分の子にも幼い時から歌舞伎を観せたが、「何言っているか分かんな～い」と言って、歌舞伎ファンにはなってくれなかった。50年余の歌舞伎ファンとしては、特に古典歌舞伎がこの先受け入れられていくのかと案じている。しかし、今回のトークイベントでは、新しい感性を持つ世代をも楽しませてくれる歌舞伎の可能性を見た気がした。

（お茶の水学術事業会　古庄洋子）